

(二) 研究彙表

諸法實相論——日蓮聖人の実相觀

田村芳朗

龍樹は中論の中で、空觀と法觀とを統合して、有無生滅の分別を超える眞実相としての諸法実相 (tattvasyaśāna)、法性 (dharmaṭā) の体系を立て、いる。しかし彼の实相論は原則を示しただけに止り、未だ積極的に現実展開がなされるに至らず、その限り矢張りなお空的否定的な段階に止るものであつたと云える。空觀による諸法実相の体系が如何にして現実に生成展開するかはその後に残された問題で、以後の大乗仏教はすべてこの問題に何程か関係しているのであつて、所謂実相と縁起の相即に苦心を拂つたのである。ところがこの問題についての考察が進むにつれて、今一つの問題に遭遇せねばならなかつたそれは眞実と現実の相即を論ずるあまり、單なる同一性的な現実肯定に陥る危険性を孕むに至つたことである。一体空觀は、現実を常住であり有なるものであるとする執見を破して、無常であり空なるものであると見ることから出発するのであるが、その無常であり空であるということに又執着して虚無空見に陥る者の生じたことから、更にこの空をも否定して「空亦復空」

という否定の否定を説くに至つた。この空亦復空としての全き否定は、しかし実は裏返せば全き肯定となるもので、所謂眞空妙有と云われたり、華嚴の一即一切、一切即一の事事無礙、眞言の即事而眞、天台の円融実相論等全てこの傾向の現れで、現実への生成展開、現実への関係づけが考察されていくにつれてその傾向が強くなつてくるのである。それが有と無との二元對立を否定して空亦復空として不二一如の円融相即を説く点は、思想としては最高の價値を有するものであるが、一方否定の否定としての全き肯定を押し進めるあまり、空本來の否定性が見失われ、更にはこの肯定的一元觀をそのまま相對的現実に適用し、事實としての現実は依然として無常であり罪惡に満ちたものであるに拘らず、善惡不二、邪正一如をふりまわして惡迷するといふ結果を生ずるに至つたのである。

日蓮聖人当時の天台はまさに右の如き傾向を有したので、「善惡不二邪正一如故強善惡不可レ云也」(早勝問答)との言葉によつても想像しうる。密教に於ては、「彼の眞言等の流れ偏に現在を以て旨とす。所謂畜類を本尊として男女の愛法を祈り莊園の望をいのる」(星名五郎太郎殿御返事)と評されている如く、この傾向は顯著であつた。聖人はそれらに對して、「天台出世惡息爲歎又惡増爲歎」(早勝問答)、又「若し是を以て勝れたりといはば彼月氏の外道等にはすぎじ」(星名五郎太郎殿御返事)、或は「只立不二不知三而二謂已均仏の大慢を成

ぜり」(聖愚問答抄)等と強く批判し、それらが不二一如の理に停滞し、しかもそれをそのまま、現実に適用して墮落したことを戒めている。そして聖人自身はそのような悪肯定、悪無差別の実相観を否定して、「底下の愚人」たる自覚を媒介として、仏凡対立の現実の事実を事実として認めながら、しかもそれを統攝する能統一の実相観を立てたのである。これが即ち「久遠実成の妙覺極果の仏の境界」(立正觀抄)としての実相である。それは「底下の凡夫理性所具」(三大秘法抄)の実相でなくして「大覺世尊久遠実成の当初証得(同抄)の実相、即ち久遠本仏によつて実証せられ、久遠釈尊の因行果徳の備わる久遠本仏果上の実相である。「其諸法実相と云ふも釈迦多宝の二仏と習うなり」(四條金吾殿御返事)と説かれているのものを指している。そしてわれ／＼にとつては、それは「正直捨方便但説無上道と信ずるを諸法実相の開会の法門とは申す也」(四條金吾殿御返事)と説かれている如く、信仰の諸法実相である。この本仏果上の諸法実相に於て眞に円融不二の世界が具現されているとみられるのであり、われ／＼は信仰によつてこそこの本仏果海の実相の世界に融入することが出来ることとされるのである。次に日蓮聖人の実相観に於て注目すべきことは、それが「力用」の実相観であることである。先にみた如く聖人の実相観は久遠仏によつて実証せられ、因果の功徳を含ませられ、久遠仏によつて統攝せられたところの具体的普遍なる実相として、能動的な救済の実相観であつた。それが仏界縁起とも称せられる

所以である。したがつてそれは単に靜止的な不二一觀に止るものでなく、又その一觀をそのまま、現実にあてはめるのではない。これらはたゞ觀念の上で立てられた抽象的な一觀でしかない。日蓮聖人の場合は、「不可見無對色を、可見有對色のかたちとあらはしぬれば、顯・形の二色となれるなり、滅せる梵音声、かへつて形をあらはして文字と成つて衆生を利益するなり」(二像開眼抄)と述べられている如く、「色心不二なるが故に而二とあらはれて」(同抄)現実に具成し、積極的な救済力用の動力の場を構成するところの実相である。それは、「一」として「在る」実相から「二」として「成る」実相である云いかえるなら、それは不二一如の実相を觀念するのではなく現実に行動するのである。即ち歴史世界に具現し実証し、歴史世界を改革しゆく実相である。「教主釈尊をうごかし奉ればゆるがぬ草木やあるべき、さわがぬ水やあるべき」(日眼女遣立釈迦抄)とて釈尊を極めて動的なものとして見、又「成仏は持つにあり」(四條金吾殿御返事)と云われ、法華經の信者は常に「法華經の行者」であると強調される所以もここに在る。「諸法実相抄」の、「凡夫は体の三身にして本仏ぞかし。仏は用の三身にして迹仏也。然れば釈迦仏は我等衆生のためには主師親の三徳を備へ給ふと思ひしに、さにては候はず、返て仏に三徳を蒙らせたてまつるは凡夫なり」という逆説的な表現も右の如き力用の実相論としてみる時に始めて理解しようとするものである。即ちこれは、仏の仏たる所以は衆生救済のために、い

わば凡夫にひかれて現れ出でて用の仏となり現象佛となるところに存することを説示したものである。それに対して衆生の目ざす所は体の佛であり本佛となることであり、そして本体に歸入すべき衆生あるが故に慈悲救済の佛が引き出されるので、云いかえれば衆生によつて佛が呼び出されるのである。こゝに説かれてゐるものは、佛と衆生との間の力動的な相互媒介であり能動的な力用救済の論理であることを知りうるのである。

## 日蓮法華宗の現代的旗幟

浦 上 芳 武

十餘年前の法華会席上、今は亡き姉崎博士の「今の日蓮宗は鮮明なる旗幟を掲ぐる要あり」との言に共感して以來、この問題に関する私の思案は絶えず胸中に去來し、今以て簡明にして完全な成案を得たわけではないが、混沌たる世界情勢と世相の下、人心の不安迷信の横行を目前にしては何時迄も躊躇逡巡する能はざるを痛感し、宗門有爲の士と共に我等は、今の世に如何なるスローガンを以て教陣を布くべきかを提案すると共に、此処に私案を述べんとするものである。

共産黨のスローガンは多くの青年層に対する迫力に於て定評

あり、総選挙に臨む各政黨も亦國民の生活感情に呼應するスローガンを競い掲ぐる如く、日蓮法華宗も鮮明なる旗幟を掲げることは焦眉の急である。日蓮聖人及びその以後の教団にはそれがあつた。一々文々皆釈尊金口の説法と信ぜられた當時に於ては四十餘年未顯眞実とか、諸宗は無得道墮地獄の根元、法華經独り成佛の法等の標語は有力なるスローガンであつたと思はれるが、今日の民衆にとつては馬耳の念仏でしかない。しかも説き方によつては今日尙相當の迫力を持つものに現世安穩後生善処資生産業皆順正法等あり、或は病即消滅不老不死等も正當に心的に正解すれば必ずしも空言と言えない。教は現代の時、機乃至今日の世界狀勢下の日本國を對象とし、教法流布の前後國民思潮の動向等所謂五綱の教判を鑑みて説くべきものであるがこれは單なる讀書士や机上の學者の爲し得る所ではない。衣食に窮せるかと思えばバチンコに怠屈をまぎらす金はあつても、聽講無料の教にも耳を籍さず、他愛もなき迷信に易々諾々と金錢を投ずる複雑怪奇なる民衆は、活眼を開く法師と雖も容易に救済し難いであらう。しかも看過し得ざる大問題は仏滅後正像末三時に関し大集經を中心とする諸經と法華經との正反對な豫言を如何に会通し得るかである。即ち通頭佛教は正法千年像法千年を経て衰退し第五の五百歳たる闍靜堅固の時代たる近代に及んで白法隱没すと説く大集經の豫言と、第五の五百歳に於て却つて「広宣流布して闍浮提即ち世界に於て断絶すること無けん」と豫言する法華經との明かなる矛盾である。しかも大集經の